僕は知人が多い

上杉龍哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕は知人が多い

【Ｎコード】
Ｎ０１８２Ｙ

【作者名】
上杉龍哉

【あらすじ】
僕は人付き合いが悪いわけじゃない。クラスの人達とだって普通にしゃべれる。だけど放課後や休日の休みに何かをしようと言ってくれる友達か皆無だ。僕は、僕は知人が欲しいわけじゃない！欲しいのは……。。。ワード：真剣で私に恋しなさい　名探偵コナン　Ｇ線上の魔王　ドラゴンボール　ゼロの使い魔　俺の妹がこんなに可愛いわけがない

1話　僕は変人度が足りない

今日も無事授業は終わった。窓の外からは運動に汗を流す人達、おそらく運動部に所属しているであろう人たちの掛け声や、吹奏楽部が演奏するメロディーが夕焼けに照らされている教室に響いていた。僕はそれを聞き流しながら教科書や筆記用具を鞄に詰める。

「優！一緒に帰ろうぜ？」

後ろから肩をポンと叩かれ、振り返るとそこには中学からの知り合い（ここ重要）でクラスメイトでもある河本君がいた。（下の名前は知らない）

「いいよ、一緒に帰ろう？」

僕の名前は郷田優。
ちょうど2カ月ほど前にキリスト系のミッションスクールである聖クロニカ学園中等部を卒業し、エスカレーター式に高等部に通うことになりました。中等部から繰り上がっただけなので周りにいる人達もほとんど中学からの顔見知りです。自分で言うのもあれですけど容姿は普通よりちょっとだけ上かな？少し童顔入ってると言われますけど周囲を惹きつけるほど立派なものではなく、かといって他人から拒絶されたりするほどひどい面構えではありません、体格が小柄なこともあって無害だと思われているようです。空気を読むのも苦手ではなく、もちろんクラスで孤立していたりすることもありません。ただ……。

「ねえ河本君……今日暇だったらどこかにご飯食べに行かない？」

教室を出て、廊下を歩きながら僕はそう提案します。しかし……。

「あ、悪りい、今日は家族と飯食いに行く予定なんだわ」

「へえ～そうなんだ。楽しそうだね？」

「おおよ！ファミレスで一番高い物頼んでやろうと思ってる」

ニシシと笑う河本君を見て僕はこう思いました。

（放課後に何かしようって誘ってくれる友達は全然いないんですよね～）

人付き合いが苦手というわけではなく、教室で話をしたりする知人はたくさんいるのですが、仲の良い……例えば放課後や休日に何かして遊ぼうと言ってくれる人となると誰もいなくなってしまう。そうですね……僕を一言で表すなら。

僕は知人が多いけど……友達が少ない。

「そういやよ、優……お前部活とか何か入んねえの？」

「えっ？僕が……部活？」

いきなりの提案に僕は少し驚きました。ちなみに目の前にいる河本君は面倒くさいからと部活には入らないそうです。

「いや、驚くことのほどじゃねえだろ？お前、手先とかむちゃくちゃ器用なんだし手芸部とかどうよ？」

「部活か～」

そういって褒めてくれるのは本当に嬉しいんだけど生憎と僕は部活に入る気はまったくありません。部活動なんてものは中等部の時にやって懲りてしまいました。

（部活なんて……部活なんて）

糞くらえです。そう思いながら夕暮れに照らされる校舎を歩いていると不意に掲示板の前で河本君が足を止めた。どうしたのでしょうか？何やら面白そうにポスターを見てますけど。

「新入部員募集のポスターの張り出しか……あっ、おい見ろよ優！このポスターむちゃくちゃ面白いぞ！」

「えっ？どれどれ？」

「ほら、これだよこれ！なんか絵がむちゃくちゃ汚いやつ！！」

河本君の指先を追うと、そこには風変わりな新入部員募集のポスターが貼ってありました。

「隣人部だってさ。あはは、一体何する部活だっつう～の！」

「……、これって」

爆笑する河本君を尻目に僕はそのポスターに釘付けになりました。そこにはこうかかれていたのです。

とにかく臨機応変に隣人

とも善き関係を築くべく
からだと共に心を健全に鍛え
たびだちのその日まで、
共に想い募らせ励まし合い
皆の信望を集める人間になろう！

一目見れば何がしたいのかよく分からない活動内容ですが……しかし、その文字列に隠された秘密が、まるでお前も来いとでも言いたげに僕の網膜に焼き付いていました。この活動内容を斜め読みすると……。

『ともだち募集』

「……これだ」

ピンと来ました。本当なら部活なんてもうやりたくないんですけど背に腹は代えられません。文面から友達作りを目的とした部活なのでしょう、ここに入部すれば知人に囲まれる生活から抜け出し、友達と高校生活をエンジョイできるかもしれません！！

「えっ？何が？」

「あっ、ううん何でもないよ。早く帰ろ？」

「やべっ、急がなきゃ飯に連れて行ってもらえなくなっちまう！」

この日、僕はここに入部することを決めて下校したのでした。まさかこの選択が僕の人生を大きく狂わせることになろうなどと、この時の僕は想像することさえ出来なかったのです。

翌日、僕はいつものように登校し、普通に授業を受け、休み時間には適当に周囲と話を合わせながら放課後を楽しみに待っていました。隣人部の部室は昨日の時点で確認済みです、後は放課後のチャイムと共に部室へと向かうことにしましょう。

ムフフと周囲の人から見れば気色悪い笑みを浮かべ、未来へと期待を馳せておりました。

「ねえ、幸村くんって……2年の小鷹先輩のパシリみたいなの、やってるの……よね？」

「はい。わたくしはあにきのしゃていですので」

「私ね、思うんだけどそういうのはやめたほうがいいと思うの、脅されてるなら先生にちゃんと言おうよ、ね？そうしよ？」

「あにきのパシリをすることがわたくしのいきがいですので」

そういえば昼休みにクラスの楠君が女子と何か話してたみたいだけど何かあったのかな？それにしても楠君は女の人みたいに綺麗に顔が整ってるからこうしてみたら女の子同士が会話をしてるように見えますね。

キーンコーンカンコーン

そんなこんなであっという間に放課後になりました。帰宅しようとする人や部活に出ようとする人で大賑わいです。今日は僕もすぐに帰るのではなく、隣人部の部室を訪ねてみようと思います。

「えっと確か礼拝堂の『談話室４』がそうだって書いてありましたよね？」

僕はポスターに書かれてあったことを映したメモ書きを見ながら教室の上にぶらさがっている『談話室４』と書かれた木札を見上げました。場所はここで間違いないようです。

「それでは……いざっ！」

意を決してコンコンと木張りの扉をノックします。

『小鷹？遅いわよ！早く入ってきなさい』

中から女性の声が聞こえてきました。僕は小鷹という人ではありませんがどうやら開けても問題なさそうな雰囲気です。僕はドアノブを回し、扉を開けて中へと一歩踏み出しました。

「こんにちは。僕は……郷田と……」

部屋の中にはハゲカツラを被った金髪碧眼の美少女がいました。

「……すいません、部屋を間違えました」

『ちょっ、ま、待って！』

見なかったことにして僕は扉を一度閉めます。おかしいな？場所、間違えちゃったかな？

『おい、悪いんだけどそこ……どいてくれねえかな？』

「はい？」

後ろを振り返るとやたら目つきの悪い人が立っていらっしゃいました。明らかにこだわりをもって染めている金髪、それにズボンの裾をあげて着崩しています。この学園では珍しいちょい悪系のファッションです。

「なるほど、この目つきにこのファッションセンス……侮りがたいです」

普通の人がこのファッションをやっても似合わないでしょうが、この人の人相の悪さが完全にちょい悪系ファッションの魅力を引き出しています。男っぽいですね、僕は童顔なのでこういう男らしさにはちょっと憧れてしまいます。

『あ～、えっと』

思わずまじまじと観察してしまったので気分を悪くしてしまったでしょうか？珍しかったのでつい、というのは言い訳になりませんね。

「あっ、すみません！なんかじろじろみちゃって」

『いや、まあそれはいいんだけど……ここに何か用？』

「申し遅れました。僕は郷田優と言います。ポスターに『ともだち募集』と書かれてあるのを見て……その『隣人部』に入部したいんですけど、なんかここ違ったみたいで……失礼ですが隣人部の部室がどこにあるか教えていただけないでしょうか？」

流石にハゲカツラは友達作りには関係ないでしょうから。

『まじか……星奈の時も思ったけど何であれがわかるんだ？あんなポスターで人が集まってくるなんて実はあれ呪われてるんじゃ？』

「あの……」

何故か気難しい顔をしながら何やらブツブツと呟いています。とりあえず現実に戻ってきてもらわねば話が進みません。

「あ、悪い悪い、ちょっと思うところが会ってな、ええと、俺は羽瀬川小鷹。一応隣人部の部員だ」

「そうなんですか？えっと僕一年生なんですけど、小鷹先輩は上級生の人ですよね？」

こんな目立つ人が同級生に居たら名前くらい憶えてるでしょうから。

「ああ、2年生だ。優、だっけ？名前で呼んでもいいか？」

「はい、もちろんです。じゃあ僕は小鷹先輩と呼ばせてもらいますね？」

僕は笑って握手を求めるべく手を出した。小鷹先輩は一瞬驚いた顔をしたのだがごく普通に握手してくれる。もしかしたらそのまま力を入れられて手を握りつぶしてくるんじゃないかと思っていただけに意外でした。

「よろしく。なんか意外とまともそうな奴で良かったよ。さあ、ここが俺達隣人部の部室だ。遠慮なく入ってくれ」

「あっ、そこは……」

変な人がいますよ。と言おうとしたけど手遅れだった。小鷹先輩は扉を開けてしまう。

『遅いぞ小鷹！貴様は何をやっていたのだ？』

今度はやたらと髪の毛のボリュームが多い女の人が出てきた。作り物の金色のカツラところどころから本来の髪の色であると推測される黒い髪の毛が見えている。

「……」

しばらくの沈黙の末、小鷹先輩は何も言わずに扉を閉めた。

「……なんかごめんな？」

「いいえ、お構いなく」

申し訳なさそうに謝る小鷹先輩の顔が、むちゃくちゃ怖かったです。

「それでお前らは何がしたいんだ？」

小鷹先輩が部室へと再突入してから少し時間が流れます。今、備

え付けられたソファーには金髪とハゲのカツラをかぶった美少女が2人座っていました。

「何って……忘れたのか小鷹？」

「ん？ああ、そういえばそうだったな」

「小鷹先輩どうしたんですか？」

「えっとな、昨日夜空が……ああ、金髪カツラの方の奴な、夜空が友達作りには笑いが必要だって言い始めて」

「はあ、それでカツラ……ですか？」

意味が分からない。

「何よ文句でもあるの？っていうかアンタ誰？」

「申し遅れました。僕は郷田優と言います。ともだち募集とポスターに書いてあったので是非僕も入部させて欲しいんです！入部届けも持ってきました！」

テーブルの上に書いてきた入部届けを提出する。

「ふ～ん、だってさ……で、どうするの夜空？」

「……なんか嫌だな」

「え？ど、どうしてだよ！？良い奴そうじゃんか？何か問題があるようには俺には思えないぞ」

渋る夜空さんに小鷹先輩は食い下がってくれます。ありがたやありがたや。

「何も問題なさそうなのが駄目だな、普通すぎる。つまらん」

小鷹先輩の必死の説得をバッサリと一刀両断しやがりました。僕は悔しさのあまり唇を噛んで俯きます。僕の実力不足、僕がこの隣人部に入るためには大切な物を持っていなかったのです。

「くっ、変人度が足りませんでしたか」

「こらそこっ、何ギャルゲーの女の子攻略しそこなって『くっ、好感度が足りなかったか』って悔しがるみたいな顔してんだよ！？」

「な、なんか小鷹もどんどんギャルゲー脳に犯されてきてるわね」

「お前のせいだお前の！」

ハゲカツラを被った星奈さんと小鷹先輩が口喧嘩を始めました。その間に夜空さんが「落ち着けお前達」と仲裁に入ったので、口喧嘩はどうにか治まってくれたようです。

「冗談はさておき、そもそも貴様は本当に友達いないのか？」

「お恥ずかしながら。クラスで普通にしゃべったりする人はいるんですけど放課後とか休日とかに遊んだりするような友達はいなくて、なんていうか僕だけ友達と思ってるようなそんな感じと言うか」

「……夜空、頼む。優を隣人部に入れてやってくれ。こいつ、他人

とは思えねえ」

後ろから小鷹先輩に肩をポンと叩かれる。どうしてこんなに泣きそうな顔をしているのでしょうか？

「むっ、ま、まあ小鷹がそこまで言うなら私は構わないが」と夜空さん。

「本当ですか！？ありがとうございます！これからよろしくお願いしますね夜空先輩」

「あ、ああ、三日月夜空だ。まあ、その、なんだ？……よろしく」

僕は感謝の言葉を述べながら握手を求めました。夜空先輩は照れているのか握手はしてくれませんでしたけど、シャイな人だなあ。

「よろしくお願いします。星奈先輩」

「はあ？何で私があんたとよろしくしなきゃいけないのよ？」

夜空さんとは一転して、星奈さんにはバシっとその手を払われました。少し馴れ馴れしかったでしょうか？小鷹先輩も夜空先輩も少し困ったような顔をしていらっしゃいます。場に嫌な空気が流れて、そのとき。部屋の扉が開きました。

「おくれてすみません、あにき、あねご」

入って来たのはクラスの楠幸村君でした。何度見ても女の子に見えます。体育の時間とかでも楠君の着替えは思わずドキッとなってしまうので直視できません。僕にそっちの趣味はないはずだと信じ

たいです。

「あれ？楠君もここの部員だったの？」

「幸村とは知り合いだったのか？」

「一応クラスが一緒なので」

「ふん。それで遅かったようだが何をしていたのだ？」

「お笑いについて勉強していて遅くなってしまいました。しかしおかげで、とてもおもしろいお話ができるようになりました」

「まあ、あまり期待はしてないが……言ってみろ？」

「はい。それではせんえつながらお話しさせていただきます」

姿勢を正し、真剣な表情で楠君は語り始めました。

「まんじゅうこわい」

そして淡々とした口調で話を始める楠君が隣人部に来てからの一番驚くべきことでした。クラスの人としゃべっているところをほとんど見たことがなかったので、これだけしゃべる楠君が新鮮だったのです。

「ぷっ、くくっ、無茶苦茶面白いなそれ！」

もっとも楠君が話し終えたところで笑っていたのは小鷹先輩だけでしたが。夜空さんと星奈さんは寒さから身を守るように縮こまっ

ています。僕も苦笑を浮かべるのが精一杯でした。

「ありがとうございます。あにき」

しかし楠君はとても幸せそうに笑います。かわいいなあと不覚にも思ってしまいました。いけません。楠君は男楠君は男。僕は念仏のように心の中でそう唱えるのでした。

2話　マリア先生は脳味噌が少ない

放課後

「楠君、一緒に部活行こう？」

授業が終わると僕は楠君のところへ走り寄りました。周囲からは好奇心に満ちた視線がこちらに向けられています。

「はい。今日も立派にあにきのしゃていをつとめなければなりません」

「そういえば楠君ってどういう経緯で小鷹先輩の舎弟になったの？」

「あにきのようなしんのもののふとなるためです」

「へえ、そうなんだ。すごいね」

ごめん、本当は良くわからなかったです。

そんなこんなで楠君と一緒に礼拝堂『談話室４』隣人部の部室前に来た。その入口には夜空先輩と星奈先輩が突っ立っている。

「夜空先輩、星奈先輩。こんにちはです、部室入らないんですか？」

不思議に思った僕は声をかけた。するとどうしたことでしょうか。部屋の入口まで行ってみると小鷹先輩が中で銀髪の幼女のほっぺをつついているところではありませんか。

「……眠っている幼女にイタズラしているヤンキーの写真が撮れて

しまった……」

夜空さんの手には携帯が握られております。携帯と一緒に秘密も握られてしまいましたって感じでしょうか？おっと別にうまいことが言いたいわけではありませんよ？

「事件のようだね。ホームズ君」

「……あにき」

隣にいた楠君にボケてみたけどスルーされた。楠君はうっとりとした表情で小鷹先輩に尊敬の眼差しを向けている。

「さすがあにきです。ようじょだろうと女ならばすべていただいてしまうのですね」

「いただいてしまわねえよ！」と小鷹先輩。

「小鷹……あんたロリコンだったの？」

「ち、違うぞ！俺は別にそんなつもりじゃ……！」

「それはこの写真を見た者が判断することだな……とりあえず適当な画像掲示板にでもアップしておくか」

往生際の悪いことに小鷹先輩は慌てて自分の罪をもみ消そうときつい言いわけを連ねます。それにしても小鷹先輩には感心しないですね。正直に言うと見損ないました。

「小鷹先輩、ロリは愛でるものであって手折るものではありません

よ？」

たとえ悪魔に囁かれようと真のロリコンたるもの、小さな子供には手を出してはいけないと思います。ロリコンとは紳士。幼い子供に慈しみの愛を与えられることが必要条件なのです。手を出してしまえばそれはもうロリコンではありません、ただの変態です。

「ロリコン道から外れ、幼女に手を出した。貴方はもうロリコン紳士じゃない！変態紳士になってしまったのです！」

なんと嘆かわしいことでしょう。「待て、俺はそもそも最初からロリコン道なんて極めてない！」と小鷹先輩が喚き散らしています。寝込みの幼女を現行犯で襲ったくせになんとうらやましい……いえ、許し難いのでしょうか？

「変態が変態の道を通るんじゃねえ、変態の道を歩いた人間が変態なんだ！」

「俺は変態でもロリコンでもヤンキーでもねえええええええええええええ！！！」

小鷹先輩が吼えました。気づけば夜空さんや星奈さん、あの楠君までもが僕から距離を取っていました。僕は何か変なことを言ったのでしょうか？

「ん……ふぁ……？」

僕が小首を傾げたちょうどその時。騒がしくしたせいか、ようじょが目を覚ましました。小鷹先輩が絶叫なんてするからですよ、もうしょうがない人だなあ。

幼女の目が開き、僕達をきょろきょろと見回しています。

「ぎゃっ！み、三日月夜空……！」

その青の目が夜空さんを捉えた瞬間、幼女は跳ね起きて前世の仇を見るように夜空さんを睨みつけました。

「久しぶりだなマリア。ようこそ私の部屋へ」

「お知り合いですか？」

「こいつは高山マリア。隣人部の顧問だ」

「顧問！？顧問ってこんな小さな女の子がですか？あっ、僕わかりましたよ。さてはとある神学の外典聖書に出てくる大萌先生みたいな頭脳は大人で見た目は子供みたいな設定なんでしょう？」

「それどっちかっていうと姪探偵カナンのノリになってないか？」と小鷹先輩。

「安心しろ。見た目はこんなだが１０歳だ！」

「見た目通りの年齢かよ」

「オマエらさっきからワタシを無視して話すんな！この社会のゴミ！ウンコ！」

「あっ、すみませんマリア先生。それで今日はどうされたんですか？」

僕は中腰になってマリア先生の目線に合わせます。マリア先生は小さな胸を張っていらっしゃり、とてもかわいらしいと思います。子供は少し背伸びするぐらいのほうが微笑ましいですよね。

「ここはワタシの部屋なんだ！お昼寝するときにここのソファが一番いいのだ！よくわからん部活の顧問なんてやめてやる！オマエらみんな出てけ！」

「管理責任者ってだけで別にアンタのものってわけじゃあないと思うんだけどね……」

星奈さんのツッコミはマリア先生の耳には届いていないようでした。顔を真っ赤にして怒り心頭といった様子でゴミだカスだクズだうんこだとはやしたてています。なぜこうなった。

「……ふん所詮子供には荷が重かったか」

「な、なんだとお……！？」

ぽつりと夜空さんが零した一言にマリア先生は大激怒です。マグマの噴火3秒前。バスガス爆発です。しかしそんなマリア先生など気に留めることなく夜空さんはこれみよがしに溜息をつきました。

「やっぱり子供に部活の顧問なんて無理があったのだな。残念だがこの部室は諦めるとしよう」

そういって夜空さんはマリア先生を見てこの一言。

「あ～あ、ただの子供なんかに任せるんじゃなかったな。責任ある大人だったら一度引き受けたことを途中で投げ出したりしないだろ

うにな～」

「ワ、ワタシは立派な大人だ！」

「背伸びしなくてもいいのだ。幼女は幼女らしくこの部屋でおとなしくお昼寝しておけ。いくら天才少女シスター・マリア先生だからといって大人がやるような難しい役割などできるわけがなかったのだ。全ては人を見る目がなかった私の責任だ」

「うーーがーーっ！！こ、顧問くらいワタシだってできるぞ！？」

「無理せずともよいのだ幼女よ」

「む、無理なんてしてないもんねー！」

「顧問なんてやりたくないのだろう？」

「や、やりたいもん！」

「では顧問を続けるのか？」

「もちろん続ける！」

「では顧問をやらせて下さいと頭を下げろ」

「お願いです。顧問をやらせて下さい」

「神に誓えるか？私は隣人部の顧問を続けます。これからも三日月夜空の言葉に従うと誓えるか？」

「誓える！」

「もしまた顧問をやめるなどと言い出したときはお前を全裸にしてその写真をネットにばらまくがかまわないな？」

「かまわない！」

「よし、ならばお前を隣人部の顧問にしてやろう。ありがたく思うがいい高山マリア」

「うんっ、ありがとう夜空……え、あれ……？ええ！？あれれえ！？」

「ではマリア先生の顧問就任に拍手」

夜空さんの拍手に、僕も合わせるように拍手を送り始めた。小鷹先輩も星奈さんも楠君もマリア先生にまばらな拍手を送る。

「よろしくお願いしますねマリア先生」

「ま、まあ全てワタシに任せておけ愚民ども！あはははは、あはあはははは！」

「よし、それでは喉が渇いたのでお茶をもってこい」

「わかったのだ！」

夜空先輩に元気よく返事を返すマリア先生。うん、やっぱり子供は元気なのが一番だと思います。こうして高山マリア先生が正式に隣人部の顧問となったわけです。めでたしめでたし。

3話　志熊さんは羞恥心が少ない

ある日のお昼休み、普段はコンビニで買ってくるのだけど今日は寝坊してしまったために時間節約のためコンビニに寄れなかった僕は、購買にパンを買いに行くと楠君と鉢合わせした。

「今日は楠君も購買？」

「わたくしはあにきのお食事を買いに」

そういう楠君は抱え込むようにおにぎりとジュース、そしてヤンキー漫画を持っています。『最強ツッパリ伝説』の13巻ですね。

「毎日大変じゃない？」

「いえ、あにきにご奉仕することがわたくしのいきがいですので」

「そっか楠君は小鷹先輩のことが好きなんですね」

なんか素で返されると逆にリアクションがとりづらいように思います。

「はい。あにきこそ真のもののふ。わたくしもいつかあにきのようなおとこになるべく日々精進しております」

「なれるといいね。いつか小鷹先輩のように」

僕がそういうと楠君は照れたようにはにかみながらもしっかりと頷きました。思わずドキッとしてしまいます。いけませんね。楠君

は男の娘、楠君は男の娘。僕は心の中で念仏を唱えます。何か気を逸らさなければ……。

「そうだ、僕も付いて行っていいかな？」

「あにきのしゃていはわたくしですので」

キッと敵を見るような目が僕に向けられます。楠君ってこういう目も出来るんだなあと思いました。

「あはは、楠君から小鷹先輩を取ったりしないから安心してよ。僕は夜空先輩から借りた本を返しに行くだけだから」

小鷹先輩のクラスは夜空さんと一緒だということは聞いて知ってる。ちなみに僕の用事と言うのは昨日の部活で夜空さんから本を借りたのだ。単純に普段夜空さんってどういう本を読んでるのかなーっていう好奇心からで、昨日の夜で全部読み終えた。おかげで寝不足、寝坊して購買に来たのだった。まあ、別に返すのは放課後でもいいとは思うのだけど。

「そういうことなのでしたら、わかりました」

「ありがとう！上級生のクラスって一人で入りにくいんだよね。楠君が一緒なら心強いよ！」

「いえ、おやくにたてたのなら……よかったです」

こうして僕は楠君と一緒に２－５へと向かうのでした○

「Ｑ線上の魔王か？」

「あれ？今のでよく元ネタわかりましたね？」

「この前星奈が部室でやってたよ」

小鷹先輩の席は窓際にありました。一年生が二年生の教室に入ったら悪目立ちするのではないかと思いましたけど楠君がいたせいかさほど注目されることなく小鷹先輩の元に辿り着けました。そして今、僕は楠君と一緒にここへ来た理由を小鷹先輩に話していたのでした〇

「それで夜空先輩はどこにいるんですか？借りていた本を返そうと思っていたんですけど」

「夜空ならちょっと席を外してるみたいだぞ？いつもは自分の机にいるんだけどな、なんなら俺から返しておくけど」

「いえ、他の人から借りた物は自分の手で返したいんで、気持ちだけ受け取っておきます」

「そうか？まあすぐ戻ってくると思うからここで待ってろよ」

「そうですね。そうさせてもらいます」

僕はそういって後ろにいる楠君に場所を譲ります。

「あにき。お食事をお持ちしました」

「ありがとな幸村」

「わたくしこそ、あにきのためにはたらけて光栄です」

美少女にしか見えない顔に柔らかな微笑みを浮かべて、役目を果たしました、そう言わんばかりにそのまま楠君は踵を返して教室の外へと……。

「楠君ちょ、ちょっと待って。君は上級生のクラスに僕一人残して帰るつもりなの！？僕は放置プレイに耐えられるようなMじゃないんだ。お願いだからもう少し一緒に居てくれ」

僕は慌てて楠君を引き留めます。ボケでも放置されるのが一番辛いんだからね！

「お前は俺を社会的に抹殺するつもりか！？」

不意に教室がざわめいた。

さっきの発言のせいでしょうか？僕はそう思って後ろを振り返ると制服の上から白衣を着た、ポニーテールの小柄な少女が立っていました。

「くすんだ金髪で目つきが悪い中肉中背の二年生男子。ふむ、先生に聞いた情報と合致します」

「小鷹先輩のお知り合いですか？」

「いや、知り合いっていうか今日理科室で倒れてるところにたまたま通りがかって保健室に運んだだけなんだけど」

「うわあ、何というか小鷹先輩って無駄に主人公属性持ちなんですよね。友達いないくせに」

何でそんなフラグイベントが発生してるんですかね？僕にもいつか女の子が空から降ってくるようなイベントが訪れたりする時が来るのでしょうか？

「お前は俺に喧嘩売っとんのか！？」

「ちょっ、やめてくださいよ！怖いじゃないですか！？小鷹先輩が怒ったらヤクザだって逃げ出しますよ」

「あにき、かっこういいです」

「嬉しくない。全然嬉しくないからな！」

正反対の僕と楠君の対応をバッサリ切り捨ててくれやがります。

「先輩が理科を保健室に運んでくれた人で間違いなさそうですね」

「理科は志熊理科と言います。志に熊、理科社会の理科。一年生です」

一年生か。僕達と同じ学年だけど……見たことないな、こんな珍しい恰好してる人がいれば友達は少ないにしても知人は多い僕が知らないなんてことないと思うんだけど。

「このたびは助けていただきありがとうございます」

「お、おお……まあそんな気にするなよ」

小鷹先輩は何故かお礼を言われたことに感動しているようだった。

「そういうわけにはいきません。労働には対価を、目には目を、これ即ち等価交換の原則。質量保存の法則は人の行動にも適応されるべきです」

「小鷹先輩、小鷹先輩。何か僕の変人レーダーがこの人に反応してるんですけど」

「そんなタイガーボールみたいなこと言われてもな」

「先輩は理科の命の恩人です。命には命相応の対価を支払わなければなりません」

「……、」

楠君が面白くなさそうに理科という子のことを睨んだ。まあ、命相応の対価を払うなんて小鷹先輩相手に言ってるんだから先輩一のパシリを自負する楠君が面白くないのも分からないことではない。意外と楠君って嫉妬深いんだね。

「いやそんな大げさな……あのビーカーの薬品って危険なものだったのか？」

「いえ、あれは即効性の睡眠薬で副作用もありません。理科自慢の一品です」

この辺の話は現場に居合わせなかった僕にはサッパリわけわかめという奴です。

「ではあにきは別にあなたの命の恩人というわけではないとおもい

ますが」

楠君が小鷹先輩と志熊さんの間に割って入ります。正直この展開は意外でした。

「あなたは誰ですか？理科は先輩とお話しているんですけど」

「わたくしは楠幸村、こだかのあにきの一の子分です」

「へえ～子分までいるんですか？小鷹先輩ってすごいんですね」

「待て、誤解しないでくれ！俺はヤンキーとかそういうんじゃないんだ！」

「小鷹先輩、ここまできて往生際が悪いですよ。必死に隠してももうみんなわかっちゃってます」

「隠してねえよ！俺は事実無根だよ、冤罪なんだよ！」

「内面が外見に滲み出るのよ！」

「そんなドラマみたいなこと聞きたくねえ！くそっ、俺は無実だっー！！」

刑務所に入れられた囚人のように叫ぶ小鷹先輩を無視して楠君と志熊さんはメンチを切り合っていました。

「なるほど、確かに命の危険はなかったかもしれません。しかし先輩が理科を助けてくれなければ理科はあそこで眠り続けていたはずです」

「まあ、そうなるな」と小鷹先輩。復活早っ！？

「すると偶然通りかかった飢えた野獣どもが無抵抗な理科を見つけ、目を覚まさないのをいいことにそのまま大変なことをされた危険もあったわけです」

「大変なこと？」

「凌辱です」

「りょ、凌辱！？」

小鷹先輩が叫びをあげると共に教室がざわめき始める。「あの娘も襲われたの！？」「畜生、小鷹の奴」「美少女二人だけでは飽き足らずついに年下にまで手を出すとは！？」そんな罵声とも歓声とも分からない言葉が確実に小鷹先輩のライフポイントを削っていきます。

「くっ、変人力５３万だと！？しかもまだまだ上がり続けて！」

「お前はいい加減タイガーボールから離れろ」

悪ノリすると僕だけ殴られました。理不尽だと思います。

「そう、凌辱です。理科の愛読している本では大抵そうなります。男たちは肉欲のままに理科の服を剥いでその滾ったものを理科の華奢な体へと――」

「ちょ、ちょっと場所を変えるぞ！」

小鷹先輩は席から立ち上がって志熊さんの手を引いて教室を出ていきました。残された僕と楠君はポカーンと口を開けて小鷹先輩が出ていった教室の出口を見つめます。

「んっ？騒がしいな？」

入れ替わるように夜空さんが帰ってきました。

「あっ、夜空先輩、借りてた本を返しに来ました。とっても面白かったです」

「ああ、わざわざすまない……何かあったのか？」

僕は楠君と一緒に夜空さんに事情を話した。

その日の放課後

「うぅ～あにきぃ～」

「大丈夫だよ楠君！小鷹先輩なら一人で七万の軍勢を相手にすることになってもきっと帰ってくるよ……多分」

「わたくしがふがいないばっかりに……あにきぃ～」

「わかった、わかったから！ほら、早く部室に行こ？小鷹先輩もきっと来てるからさ」

「わたくしはあにきにあわせる顔がありません。かくなるうえは、腹を切って果てるしょぞん」

「うわぁーーー！！？落ち着いて楠君、せっぷく丸みたいなこといっちゃ駄目なんだからねーっ！」

「いや、離してー！あにきにわたくしのかくごをみてもらうのですぅぅ」

取り乱して女の子のような悲鳴をあげる楠君。僕は暴れる楠君を連れて隣人部の部室まで来ていました。先程から楠君はあにきのピンチに何も出来なかったと悔やんでおり、せっぷくだ、はらきりだと泣き叫んでいます。はっきり言って大げさだと思います。僕は逃げようとする楠君を捕まえながら部室への扉を開けました。それにしても楠君の身体は男とは思えないほど柔らかくてふにふにしています。何か変な趣味に目覚めてしまうのではないかと思ってしまいます。いけませんいけません。楠君は男の娘、楠君は女の娘……って違う違う。ああもう、頭の中までおかしくなってきやがりました。

「よお」

中には小鷹先輩が普通にいました。夜空さんと星奈さんも既に来ていたようです。

「イラッ」

「ど、どうしたんだよ優？」

さんざん心配させといてそりゃないでしょうよ大将。

「あにきぃぃぃぃ！！」

「うわっ、どうしたんだ幸村？」

「わたくしは、わたくしはあにきのパシリ失格です。かんじんなときにおやくにたてませんでした」

「んなことねえよ。幸村はいつも俺のこと考えてくれてて、立派にパシリしてくれてるっつうか……って何言ってるんだろうな俺」

後ろ頭を掻きながらニヒルに笑う小鷹先輩。なんか妙に様になっております。

「うぅ、あにきにそうおもってもらえているなんて……わたくしは果報者です」

「だから泣くなって、ほら涙拭け、男は涙なんて見せねえもんなんだぞ」

「はい。あにき！」

パッと雨上がりのアサガオのように綺麗な笑みを浮かべる楠君だったのでした。キャッシュな人だなあ～。

「ユニバぁぁぁぁぁ～～～～～～～～～～～スッ！！！」

突然上げられる熱狂的な狂声。横を見るとそこには元凶とも言える志熊理科さんがいました。

「あれ？えっと志熊さん……でしたよね？」

「はいそうですよ」

「何故ここに！？」

「私もここに入部することにしたんです」

「えっ？」

夜空さんのほうを見れば複雑な表情をしながら入部届けと書かれた書類をぶら下げている。

「よ、よろしくお願いします」

志熊さんはニコッと笑みを浮かべると白衣を翻して未だ床に転がって楠君にしがみつかれている小鷹先輩へと駆け寄っていきました。そのまま空いている左腕に楠君と同じようにしがみつきます。

「よろしくおねがいしますね。せいぜい理科と小鷹先輩の邪魔にならない程度に」

「ぜったいまけません。あにきのパシリはわたくしなのですから！」

楠君と志熊さんの間に火花が散った。小鷹先輩はどうしたらいいのか分からず僕に助けを求める視線を送ってきますが、僕は意図的にＳＯＳ信号を遮断することにしました。

「……肉といい、何故あんなゴミみたいなポスターで……」

「なんなのよこの子……！なんで小鷹にこんな懐いてるのよ……！」

後ろの方で夜空さんも星奈さんも面白くなさそうにぶつくさ言っています。

「小鷹先輩って……モテるんですね」

しかし一番面白くないのが僕だったということは間違いないでしょう。今回割食ったのって絶対僕ですよねー。

4話　僕は努力値が少ない

志熊さんが入部してしばらく経った放課後の出来事です。

「ときに先輩方。結局この部は具体的になにをするんですか？」

僕は机で趣味のクロスワードパズルを解いていました。楠君はポットのそばでぼんやりした顔で立っています。いつでもコーヒーを淹れられるように、見上げたパシリ魂です。小鷹先輩と夜空さんはソファーに座って読書。こうしてみると文学系カップルに見えますね。いえ、小鷹先輩の横でマリア先生が小鷹先輩にもたれかかるように座りながらポテチを食べているところを見ると夫婦のようにも見えます。星奈さんはＴＶの前でギャルゲーをプレイ中。アダルトバスターズというゲームでその筋では大変有名なギャルゲー、プレイした人から同じメーカーの前作であるＣＹＡＬＡＮＮＡＤと合わせてキャラナドは人生、アダバスは青春と呼ばれるほどに人気の不朽の名作です。僕も友達の勧めで両方プレイしたことがあり、特にアダバスの京介さんは今でも心の師匠だと思っています。星奈先輩も名作の世界観に引き込まれ、さっきから「贅肉ノンノーン」とか「私達がアダルトバスターズよ」とかＴＶ画面に話しかけています。大変良い傾向といえるでしょう。

「まあ、決まった活動は今のところないな。誰かが『友達作り』に役立ちそうななにかを思いついたらとりあえずそれをやってみる感じで」

「友達作りですか。例えばみんなでゲームをやるみたいな感じですか？」と僕。

「うっ、嫌な思い出が……モン狩りで痛い目に」

「はい？」

小鷹先輩は過去のことはもう忘れたい。黒歴史なんだあれは。そういってくすんだ金髪頭を抱えながらもがき苦しんでいました。隣では夜空さんも表情に苦みが出ております。どうしたのでしょうか？不意にＴＶから曲が流れてきます。画面はラストの京介さんが「卒業旅行に行くぞ」そう言ってアダルトバスターズの面々を連れて山へと繰り出すところでした。

「もう迷うな……」

エンディングが流れるとともに星奈さんが肩をふるわせながらゆらりと立ち上がりました。何かぼそぼそ言ってて怖いです。星奈さんは虚ろな目で周囲を見渡すと夜空さんのところで止まりました。

「とっとと死ねえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

「うわ！？肉っ？貴様錯乱したか！？」

そして星奈さんは夜空さんに飛び掛かりました。夜空さんも星奈さんの髪を引っ張りながらの大乱闘です。大乱闘クラッシュシスターズです。しかし僕には星奈さんの気持ちわかりますよ。たまにゲームとかアニメとかの台詞って叫びたくなる時ってありますよね。

「星奈！？落ち着け！三次元に戻ってこい！！」

「……あ……！」

夜空さんのすぐ隣に座っていた小鷹先輩が制止に入ります。そのおかげで星奈さんはようやく正気に戻ったように周囲を見回し、しまったというような表情を作りました。

「ち、違うわよ！？ちょっと殺ってみただけだからね！？現実とフィクションの区別くらいついてるから！」

「暴力など空想の中だけでやれ馬鹿者！」

「うっ、ご、ごめんって夜空」

「ふん」

夜空さんは鼻息を荒くしながら星奈さんを引きはがしました。流石に星奈さんも自分が悪かったと思っているのかいつになく素直に謝ります。しかし夜空さんは許す気はないとでも言わんばかりに鼻を鳴らしてそっぽを向いています。

「ま、まあ許してやれって、星奈も悪気はなかったみたいだし」と小鷹先輩。

「許すも何も襲ってきたのは向こうだぞ！？」

「だ、だから悪かったって言ってるじゃない！？」

「悪かったで済んだら交番はいらない！」

夜空さんと星奈さんが再び喧嘩の構えを取る。

「ところで星奈先輩はゲームが好きなのですか？二次元と三次元を

混同するほどに」

その様子を見ながら志熊さんはＢＬ本を閉じてそういった。

「そ、それほどでもないんだけど……ま、まあ、それなりにね」

「二次元の世界に入れるとまでは言いませんが、似たような体験ができるゲームでしたら持ってますよ？」

「ホントに？」

「面白そうですねそれ。みんなで出来るゲームなんですか？」と僕。

「というか多人数でやるゲームなのでずっと理科室に放置してました。やりますか？」

「やるわ！」

星奈先輩が即答し、他に反対もないようだったのでみんなでそれをやることになりましたとさ。

そして理科室から運んできたのはごついゴーグルのような機械でした。

「なんかあれですね。ＳＦ系の作品に出てくる次世代ゲーム機みたいですね」

「別に未来アイテムというわけではないんですけどね、世界のラー

ジハード社が開発中の最新型ヘッドマウントディスプレイ『バーサルボーイ』です」と志熊さんは僕にそう答えながらノートパソコンを立ち上げていた。

「えっと、これを被ればいいわけか？」と小鷹先輩。

「それでこっちがゲーム操作用のゲームパッドです」

「へえ～、このヘルメットみたいなのって見た目ごついのにあんまり重たくないわね」

星奈さんがバーサルボーイを被ると、それに続くように夜空さん・小鷹先輩・楠君・マリア先生・僕とバーサルボーイを被っていきました。

「真っ暗で何も見えないぞー？」とマリア先生。

「今、ソフトを立ち上げていますからもう少し待ってください」

しばらくしていると『ラージハード』の社名ロゴが画面に表示され、目の前に美しい山河や草原が映し出されました。

「おおー」

「凝ってますね、映画のスクリーンよりも迫力あります」

まるで自分がそこにいるように錯覚するような映像に歓声が上がっています。しばらくしてヘッドホンから荘厳な音楽と共にナレーションの声が入りました。

【佐賀――そこは最後のフロンティア】

「なんでだよ！」

小鷹先輩が横で突っ込んでいます。

【東京の人に「佐賀県の位置はどこでしょう？」という質問をしてみても9割の人間が答えられず、挙句の果てには「琵琶湖があるところでしょう」と自慢気に答える人までいる始末】

「なんか佐賀県民の愚痴みたいになってるぞ！？」

【ふざけんなよ……お前らふざけんなよ！たかが琵琶湖があるからって調子に乗るなよ滋賀が！】

「ナレーションでキレた！？」

「小鷹先輩さっきからゲームに突っ込んだら駄目ですよ？そういうものなのだと受け入れることが世界観に溶け込むための秘訣です」

「お、おお……」

【時の佐賀県知事は現状に終止符を打つべく、異世界から魔王を召喚し、その力で佐賀県をメジャーにしようと企んだ】

画面が切り替わり、おどろおどろしい雰囲気の城塞が目の前に現れる。画面の下側に城の名前が表示されました。

【――ヴァルハラ城――】

「オープニング長いので飛ばしますね」

「え？ちょ、気になるんだけど！？佐賀県のヴァルハラ城が超気になるんだけど！」

突然志熊さんと星奈さんの声が『バーサルボーイ』を通じて聞こえてくる。

「ざっと説明すると、みんなで協力してヴァルハラ城の魔王を倒すのが目的です。魔王を倒した後は他県を征服する展開になるんですけど、それはインターネットに接続しないと遊べません」

志熊さんがさらっと飛ばされたオープニングの説明をしてくれました。

「キャラメイクに入りますが外見は細かくやっていると時間がかかるので今回は理科が皆さんの姿をもとにあらかじめ作っておきました。選ぶのは職業だけです」

そしてキャラメイク画面に。目の前に鏡が現れ、僕の姿を映し出しています。その鏡の横にウインドウが表示され、中には選べる職業リストが表示されました。

「ざっと百種類くらいかな？なんか目移りしてしまいます」

中には定番の盗賊やら魔法使いやら戦士やら様々な種類の職業がありました。僕は長い時間悩んだ末に、その中から目についた一つの職業をセレクトしました。すると鏡が画面全体に広がり、気づいた時には草原に立っていました。

「優、遅いぞ？」

「すみません夜空さん、なんか目移りしちゃって」

後ろから聞こえてきた声に僕が振り向くとそこには薔薇の着ぐるみを被った夜空さんが……って。

「夜空さんその恰好は何ですか？」

夜空さんの姿は薔薇の着ぐるみを被り、茎の部分から手足を出しているだけという何とも不気味な姿をしていました。

「薔薇少女という職業を選んだらこうなった」

どちらかというと薔薇人間ですけどね。

「そ、そうですか……お似合いですよ？」

「……ふん」

夜空さんの後ろには志熊さん・小鷹先輩・楠君・星奈さんがいます。マリア先生だけはまだ来ていないようでした。

理科さん

尻が見えそうなほど短くカットしたデニムのショートパンツに、ほとんど下着のようなチューブトップという露出の高い服装で、右腰のホルスターには拳銃が差し込まれています。

星奈さん

サラシを巻いて下は作業ズボン。巨大なハンマーを武器に持って

います。

楠君

真っ赤な大鎧で、兜は頭全体を覆い顔も目以外は面頬で隠されています。

「何となくですけど装備から職業が予想できるものが多いみたいですね……」

「服装は職業をイメージして作られたものが多いですから」と志熊さん。

「そうですか、それで小鷹先輩は何でそんな死にたそうな顔をしているんですか？」

小鷹先輩はケミカルウォッシュのジーンズ、服はアニメ調の美少女が大きくプリントされたTシャツの上によれよれのネルシャツ、頭にはバンダナをハチマキのように巻いた、秋葉原ファッション。夜空さんレベルで職業が予想出来ない。

「うるせえ！これでも俺は『魔法使い』を選んだんだよ！」

「……なんで魔法使いがオタクファッションなんですか？」

「製作者がＲＩＡの大ファンなんですよ。そのゲームに登場する主人公は３０歳まで童貞を守り通せば魔法使いになれるという教えを信じ込んでいるんですけどその原作リスペクトに乗っ取ってそういう設定にしたんだそうです」そんなオマージュはやめてくださいとお願いしたんですけどね、と志熊さん。

「それで小鷹先輩は見事三十路まで童貞を死守したというわけですね？」と僕。

「それをやり通したのは断じて俺じゃねー！！？」

「大丈夫ですよ小鷹先輩。もしもの時は理科が小鷹先輩の童貞をいただいちゃいますから」

「なっ！？」

「理科、貴様なんという破廉恥なことを！？」

「あれ？夜空先輩って意外と初心なんですね」

顔を真っ赤にする夜空さんをからかうように志熊さんがニヤニヤと笑っております。僕も淑女たるものあまりはしたない言葉は使うべきではないと思いますが指摘してとばっちりを受けるのは怖いのでスルーすることにしましょう。

「あにき。わたくしでよろしければいつでもお相手しますが」

「「いや、楠君（幸村）は男だから（じゃない）」」僕と星奈さんが同時に突っ込む。

「むう、あにき」

「き、気持ちだけもらっておくよ幸村」小鷹先輩は頬を引きつらせながらそう返した。

「はい、あにき」

そういって嬉しそうに笑う楠君。小鷹先輩は面食らったように少し顔を赤くしてキョロキョロと周囲を見渡し。

「そ、そういう優は何でジャージなんだよ？」と僕を緊急避難に使うべくけしかけてきました。

「……えっ？ジャージ？」

目線を動かしてみても自分の姿を見ることはできません。

「あっ、メニューを呼び出して『装備』を選べば自分の姿も確認できますよ」

視線を動かす僕を見て志熊さんはそういってくれました。メニューを開いて確認した僕の姿は……上下とも赤のジャージ。

「ちょっ！？なんでジャージなんですか？それに僕職業で努力家を選んだはずなんですけど何でジョブが村人Ａになってるんですか！？既に職業ですらないじゃないですか！？」

「待て、努力家の時点で既に職業じゃないことに気づけ」と小鷹先輩。

「嘘だ！空手家だってあったじゃないですか！？僕は週刊少年ジャックばりの努力家になるはずだったのに！！心にいつもジャンプを隠し持っているというのに」

「そうだな、ナイフで刺されると痛いもんな」

「物理的な意味じゃないですよ！？」

小鷹先輩に僕はそう突っ込む。

「週刊少年ジャックには一つの都市伝説がありまして」と志熊さん。

「曰く、『努力すればするだけ強くなれる』と」いや、そんなドヤ顔で言われても。

「努力はちゃんと報われなきゃ駄目なんだよ！」と僕。

「ふん。Ｆｉｇｈｔのうっかりで正義の味方を召喚しちゃった赤い悪魔みたいなこと言っても駄目なんだからね！努力が必ず報わなければならないなんていうのは馬鹿の言うことよ。勝つのは常に才能のある人間。つ・ま・り私よ！あんたみたいなクズは妄想に溺れて溺死しなさい！」

「まあ、努力家は初期ステータスが全職業中最低でスキルは『努力』しか覚えることはありません。もちろん魔法なんて使えないですし、混乱・猛毒・眠り・石化・暗闇・狂化などの様々なバッドステータスにかかりやすいです」

「で、でもその分成長度は高いんですよね！？」なんたって努力家なわけですし。

「いえ？成長度も最低ですよ？」と志熊さん。

「努力家なのになんでさ！？」

「それは才能がないからじゃないでしょうか？」

「身も蓋もないよ！？」

「製作者は努力家に何か恨みでもあったのか？」と小鷹先輩。

「あ、あんまりだ……訴えてやる、訴えてやるぞ、訴えてやるからなの三段活用！」

「優、落ち着くんだ！三段活用になってないぞ」と小鷹先輩。

そんなとき、目の前に光の球が出現し、中からマリア先生が現れた。

「ふはははは、ワタシを崇めよ愚民ども！」

純白の装いに身を包み、まさにシスターとでも言うべき姿。木製の杖を携え、その杖先には水晶が嵌め込まれている。

「あっ、マリア先生は僧侶にしたんですね？」と志熊さん。

「神の使徒は、いつでも神の使徒なのだ！」と胸を張るマリア先生。

「ねえ小鷹先輩？」

「皆まで言うな、優」

マリア先生のこの恰好、どこかで見たことがあるような……。

「とりあえず全員が揃ったし行くか」

夜空さんの掛け声で僕たちは先に進むことにしましたとさ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0182y/

僕は知人が多い

2011年11月9日01時09分発行